

1. 身体表現とは

イメージを中心とした「動きの表現」

音楽的なものに合わせた「動きのリズム」

自由で豊かな「創造的な動き」

2. 発達を支える身体表現とは…慣れ親しんだ〈絵本〉の世界のイメージを身体で表現して遊ぶ活動を例に

子どもの興味・関心をベースにして活動を作ることが可能。

イメージを身体で表現することは→身体を意図的に動かすことである→動き、身体の発達が促される。

3. 発達の過程を理解する…保育者は、良い観察者として、どこをどのように見るか

心の動き 何を楽しんでいるのか、〇〇そのものになる、先生や友達の動きを「まねる」→一緒に、合わせてみる（身体感覚を使う）、友達を通して自分に気づく、私はこうしてみたい＝「自己決定」「主体的な活動」

体の動き 乳幼児期の運動発達は生涯にわたり利用される運動技能の土台を形成する（砂時計モデル）☞図参照。

遊びの中で多様な動きを経験していることが大切（幼児期運動指針）☞資料参照

身体表現活動の中に「走る」「跳ぶ」要素が含まれていると身体活動欲求が満たされる。

4. 身体表現の内容研究…「動きの表現」物語で遊ぶ、なりきる、フィクションの中で遊ぶ

☆どのような気づきがあったかグループワークを行きましょう。

①『ぐりとぐらのかいすくよく』 さまざまな泳ぎ＝多様な移動（歩く、走る、跳ぶ）

- ・指人形シアターを見る：遊びのイメージを膨らませる 「波に変身してみようか」「ぐりとぐらさんも気持ちいいって…」
- ・大きな波、小さな波：「ザブッ、ザブッ」ジャンプで大きな波、小さな波、広がる、手で波の表現
- ・指人形シアターの続きを見る：くらげ泳ぎ、クジラ、いるかジャンプ、海坊主さんを呼ぶ
- ・海坊主と一緒に泳ぐ：くらげ泳ぎ（ゆっくりな動き）、いぬかき（早いリズム）
友達の動きへの気づきを促す
- ・いろいろな泳ぎ：いるかジャンプ（低い→高い、走る→ジャンプ）、ひらめ泳ぎ（片足バランス、手足の協応）、潮をふく、ついたて（高さを意識）、
- ・くらげ泳ぎを友達に見せる：自分なりに工夫したことやうまくできたことを友達に見せる、喜びになる、他の子どもへの刺激
- ・得意な泳ぎで保育室へ戻る：思い思いの泳ぎ

気づきノート（子どもは何を楽しんで、どのように動いていましたか。保育者はどのような援助をしていましたか。）

②『ジャックと豆の木ごっこをしよう』(音を使った身体表現と鬼遊び) いろいろな走り、全身を力いっぱい動かす

- ・エプロンシアターを見る：保育者の全身を使った身体表現を見る ドスンドスン
- ・ジャックと豆の木ごっこ始まる：伸びていく蔓になる イメージと体の動き (音楽で)
雲の上を歩く (ふんわり歩く) 音楽に合わせてそれぞれの場面を表現する
- ・保育者は子どもの模範となるように大きく体を動かす。物語を鮮明にイメージできるよう場面に応じた台詞を言う。大男になって歩く (腕を振り下ろし、力強く両足を交互に踏む)
- ・子守唄を聴いて眠る (寝そべる (しゃがむ立ち上がる))
- ・たてごとと鶏に忍び足で近づく 急いで隠れる (音に反応)・たてごとと鶏を奪って逃げる (まるく走る)、たてごとが鳴ってしまった (さらに走る)、大男が追いかけてくる (逃げる、さらに早く)
- ・斧で蔓を切る (全身を使って打つ)、大男を倒しみんなで喜び
- ・上手に表現できた友達の動きを見る：雲の上の動き、力強い動き ・豆の木で (伸びて) 終わりとなる

気づきノート (子どもは何を楽しんで、どのように動いていましたか。保育者はどのような援助をしていましたか。)

③『ねこになって遊ぼう』(巧技台 トランポリン フープ いかだ (マットでも可)) 遊具を使って手足の協応動作

- ・絵本の読み聞かせ、じいさんねこからの手紙を受け取る：ちず、てがみ
- ・ニャゴニャゴ島へ行く：ねこになって行く (四つ這い)
- ・ニャゴニャゴ島で遊ぶ：大きな魚を捕まえるために手足を鍛える「手や足を鍛えようじゃないか」
よじのぼる、跳び下りる、高さのあるところを渡る、トランポリン、ロープでいかだ、いかだに乗って海を渡る、ぶら下がる、ぶら下がりながら移動、腹ばいで平均台を移動、座って移動
- ・大きな波をくぐる：新聞紙 場面に変化を持たせる 意欲が高まる くぐる、通り抜ける
- ・巨大な魚をつかまえる：集まる みんなで「こもりうた」を歌う 寝ている魚が起きないように
- ・みんなで魚を捕まえる：捕まえる やったー 動きを合わせる (同調)
- ・切れ目を付ける (はがす) 食べる、おなかいっぱい、ねそべる、ブリッジ
- ・お腹いっぱいになって、まだまだ遊ぶ 「見とって」「見でて」自信が持てた？

気づきノート (子どもは何を楽しんで、どのように動いていましたか。保育者はどのような援助をしていましたか。)

5. 豊かな身体表現のために

・遊びの内容を豊富に

イメージの共有に時間をかける、ダイナミックな環境設定、保育者の動きが刺激となって（見本ではない）一斉活動として効果的に活用：自由な遊びでの嗜好の偏りに対応して。

=未体験の活動のおもしろさに気づかせるためにはクラスの子どもを対象とした一斉の活動も有効
自由な遊びを選択する時間帯の活動につながる 経験の連続はレパートリーが広がり、経験が深まる
集団遊びが自然発生することは難しい 「楽しさ」の経験の積み重ね

・伸び伸び遊べるよう安全面の配慮

【参考資料】

○運動発達の段階とステージ

(砂時計モデル)

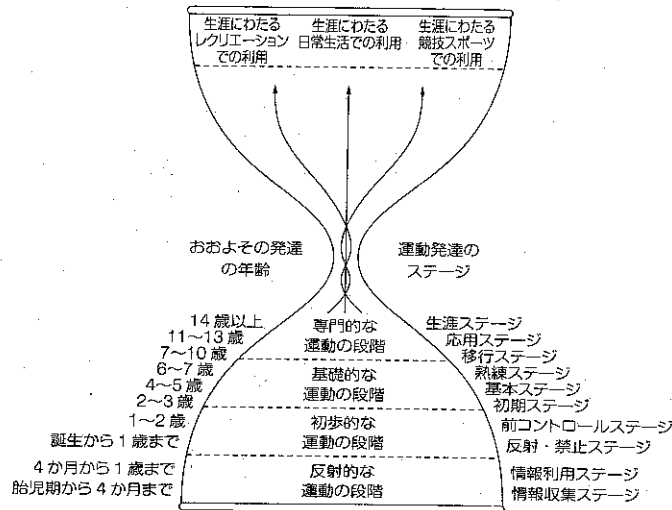
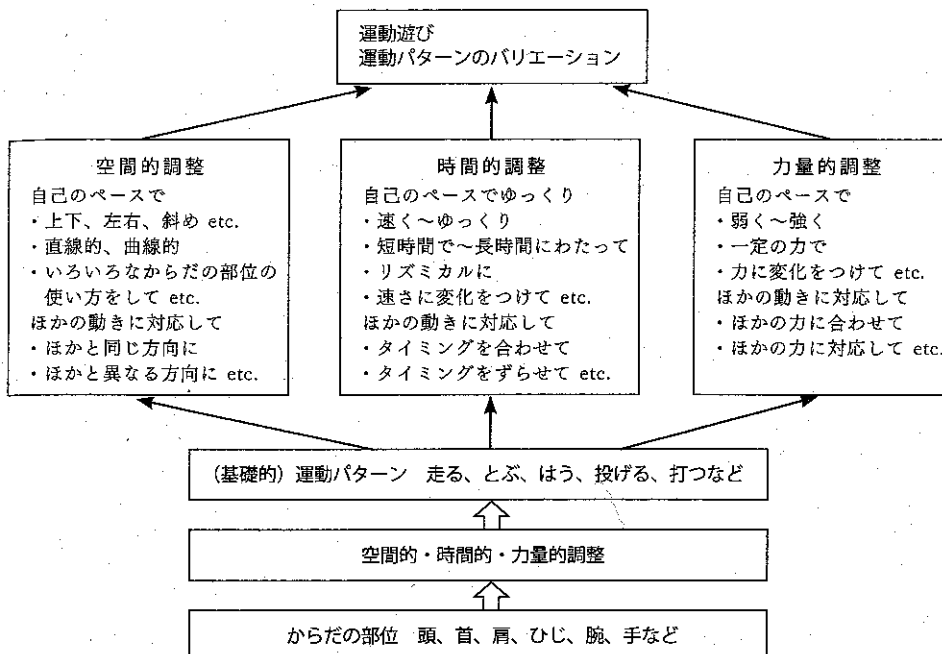


図2-3 運動発達の段階とステージ

出所：ガラヒュー（1999）より。

○動きのバリエーションを変化させる3要素

【図表3-2】 動きのバリエーションを変化させる3要素



○幼児期運動指針（文部科学省）平成 23 年度

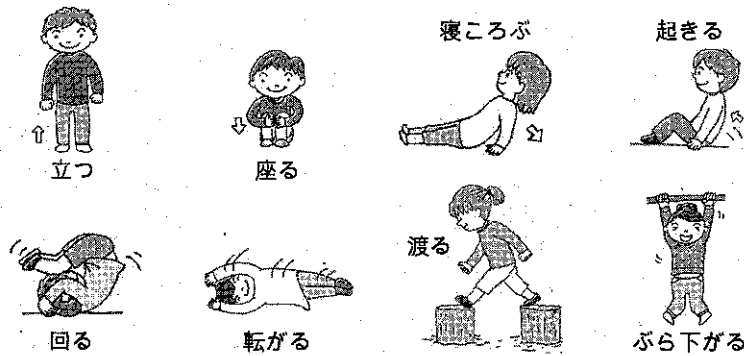
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319192.htm

4 幼児期の運動の在り方（2）運動の行い方

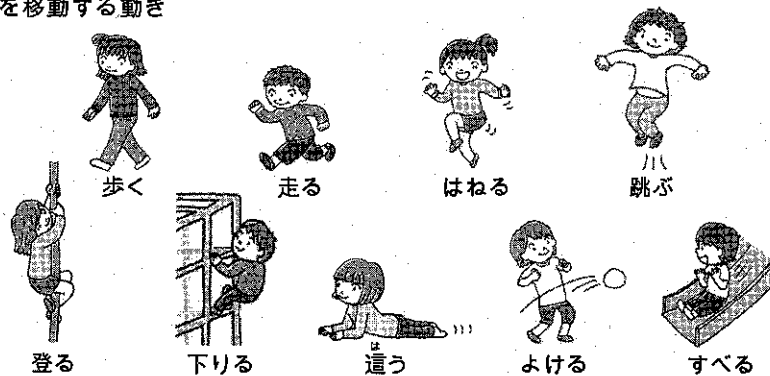
- 1) 多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること 2) 楽しく体を動かす時間を確保すること 3) 発達の特性に合った遊びを提供すること

幼児期に経験する基本的な動きの例

体のバランスをとる動き



体を移動する動き



用具などを操作する動き

